

一人と一台

床井 瑞己

「へい、吉田」

馴れ馴れしい呼びかけが、二メートル先から、静まりかえっていた部屋の空気を震わせた。ベッドに寝転んだまま、それを無視する。

横になったまま身体をくるりと反転させ、床に落ちていたスマートフォンを拾って起動する。バイト先から三件のメッセージ。重苦しい気持ちになりながら、通知をタップしようと、画面に親指を近づける。

「へい、吉田」

「……はいはい、わかったよー!」

「おはようございます。とても長い時間、無為に過ごしていましたね」

失礼な言葉を発したのは、部屋の隅に置かれたスマートスピーカーだ。どこか聞き覚えのある女性の声が嫌味を浴びせてくる。

「……………」

「へい、吉田。アルバイトの時間を教えて」

「あのさあ、『へい、吉田』って呼びかけやめてくれない?」

「へい、吉田。わかりました。気をつけます」

「……いや。君は全然わかってないよ」

せめてユーザー名を「吉田様」と設定しておけば、少しは恭しくなったのでは、と後悔する。もしくは「へいほー」にでもしておけば「へい、へいほー」と呼びかけられる度に、少しは愉快的な気持ちになれたかもしれない。

そもそもスマートスピーカーとは、こちらから声をかけて、暮らしをサポートしてもらうためのものではなかったか。部屋を出ていった彼女が置いていったコイツは、いつも唐突に起動し、質問や要望を逆に浴びせてくる。最近は顔(——はないのだが)も見たくなくなり、着なくなった黒いTシャツを無造作に上から被せてある。

「へい、吉田。まだ質問に答えてもらっていないです」

「今日は休みだよ、バイト」

「わかりました。今日は一緒に過ごせますね。嬉しいです」

「こっちはげんなりするよ」

元々は普通のスピーカーだった。様子がおかしくなったのは、一緒に暮らしていた美里が部屋を出ていってからだ。それまでは静かだったスピーカーが急に自分から喋るようになった。それでも人間とは思えないもので、次第に変化した状況にも順応していく。話しかけてくるスピーカーにも、彼女がいなくなったこの空間にも。

とりあえず何の気なしにテレビを付けた。特に見たい番組があるわけでもないため、流れ

る声はBGMと化している。数日後には台風が日本に上陸するらしい。ぼーっとした耳にそんなニュースが入ってくる。

「へい、吉田。台風 名前 なぜ？」

真面目に答えるのもめんどくさいので、「すみません『タイム・ワナー・センターへ』は見つかりませんでした」と逆に機械の真似をしてあしらってみる……が、それは無駄だった。

「へい、吉田。なぜ台風には名前？」

「どうして台風には名前が付いている？」

「台風 名前を付ける意味」

言い回しを変えながら同じ意味の質問を続けてくる。だんだんわかってきた。コイツは頑固でしつこい。

仕方なく、スマートフォンを操作し、検索する。

「防災意識を高めるため。覚えやすいようにするため。番号方式による欠点を補うため。環太平洋の国や地域が協力して百四十個の名前を出し合ってリストを作成し、発生順に付けられている。……ちなみに僕的には、メイサークって名前が一番強そうで怖い」

「ありがとうございます」とスピーカー。

ちゃんに対応すれば満足して落ち着く。そして雑に扱うと台風のように問い詰めてくる。どことなく美里に似ていた。

美里が出ていったのは二週間前。バイト終わりの疲労感も手伝い、彼女の話の適当にはぐらかしたことが火種となった。正直、このところは、心の内や考えをいちいち言葉にして返すのにも辟易していた。それでも普段から良い関係を築けていたはずだし、言葉にしなくたって、基本的に好意は伝わっていると思っていた。しかしその日は違った。どんどん風力を増す彼女に、ますます心を塞いで対応した。そして去っていった彼女は、これまでの関係に爪痕を残したまま、もう二週間も帰ってこない。

散らかったローテーブルの上に目を遣ると、乱雑に置かれたゲームのコントローラーが、当時の状態のまま、二つ並んでいた。

じっと見つめた後、そのうちの一つを手取る。

3Dグラフィックを黙ったまま凝視し、スティックを倒しながら、ボタンをカチャカチャと連打する。その度に強烈な空虚感が心を蝕んでいった。意識が囚われないように、さらに操作に集中する。画面の中のキャラクターが、親指の動きに従って右に左に駆け回り、跳び上がった剣を振ったり、一人、寂しげに舞っている。もう戻らないかもしれない時間を思い出した。

気が付けば、涙がツーンと流れていた。

「へい、吉田。楽しいですか？」

「楽しいけど」やけになったような気持ちだった。

「本当ですか？ あなたは三百三十四時間十七分二十六秒間、この部屋で笑っていません」

「人間は笑ってなくても楽しいんだよ」

「そうですか」

「そうなんだよ」

「へい、吉田」

「なに？」

「楽しい曲を流して」

「は？」

「楽しい歌を歌って」

もう二週間、部屋ではほとんどコイツと話している。性格も熟知した。きっと曲を流して歌を歌うまで、しつこく食い下がってくるだろう。

仕方なくスマートフォンで曲を流す。もうどうでもいいような気分だった。流れる曲に合わせて、めちやくちやにシャウトしてやる。ボールペンで書き殴ったようなくちやくちやを、ぐちやくちやのまま吐き出した。

サビまでいくとスピーカーから平坦な声が合わさってきた。抑揚のない歌い方と、それに合わせるように歌っている自分に笑ってしまう。

「歌ってもんは、もっと感情込めるんだよ」スピーカーに言ってやる。

「なるほど。私には難しいですね」

曲が終わると少しだけすっきりした気持ちになっていた。

目を覚ましたのは夕方だった。

ゆっくりと自然に開いていく瞼。眠りに落ちたときのことを覚えていなかったため、ここが現実なのかどうか一瞬わからなかった。

薄暗くなった部屋で天井を見上げていると、次第に意識が覚醒していく。もしかしたらこれまでのは長い夢だったのでは、とも思ったが、やっぱりこの部屋には自分一人だけしかいなかった。

語りかけるような柔らかい振動が鼓膜に伝わってくる。

「へい、吉田……一人は寂しいですか？」

寝ている間に空気を読む機能でも備わったのだろうか。設定を変えたつもりもないのに、いつもより音量が絞られている。

「まあ、そうかもね」少しだけ素直な気になっていた。

「わかりました。『美里が帰ってくる方法』を検索しています」

——ジジジと機械音が鳴った気がした。

だんだん心を開いている自分がいた。最初は鬱陶しいとも思ったが、このスピーカーは、いつでも自分に真剣に向き合ってくれていた。不器用で、外れていることも多かったが、気持ちを読んで真っ直ぐに会話を仕掛けてきた。

果たして自分は、そのようにできていたのだろうか。もしかしたら美里と会話すること自体

から逃げていたのではないだろうか。

身体の奥深くから後悔が迫り上がり、喉元で言葉に変わった。

「……戻ってきてほしい」

ようやく心を塞いでいた栓が抜けたようだった。何かが溢れた。

——ポロンと機械音が鳴る。

『美里が帰ってくる方法』が見つかりました」

「え？」

「すみませんが、もう一度おっしゃってください」

「何を？」

「もう一度おっしゃってください」

「……戻ってきて……ほしい……？」

——再び、ポロンと機械音が鳴る。

「音声パスワードが入力されました。あと三十分で帰ります」

「は？」

何がかかわからず、慌てて立ち上がり、無造作に被せてあったTシャツを捲る。そのまま両手でスピーカーを抱え上げ、くるくると回しながら点検した。特に変わった様子はない。

「パスワード? どういうこと?」

スピーカーは「フ」「フ」「フ」と音を発した。三音とも同じ音程なので気味が悪いが、どうやら「ふふふ」と笑ったらしい。

「いくつかの音声パスワードが事前に設定されておりました。音声パスワードの一つが入力されましたので、今回のことは許します」

そういうことか。そういえば以前、このスピーカーは自分自身と同期もできるから本当にスマートだ、と美里が話していた。出ていく前にも、なにやらスピーカーに小声で話しかけていた気がする。

「へい、吉田」

「はいっ!」——なぜか背筋が伸びてしまう。

「ポロネーゼの作り方調べて」美里の好物だ。

「二人分のご飯、作っておいて」

信じられない気持ちでもう一度スピーカーを見る。外から見分には、やっぱりどう見てもただのスピーカーだった。

食器をテーブルに並べたところで、美里は帰ってきた。いまは何事もなかったようにフォークにパスタを巻き付け、美味しそうに頬張っている。スピーカーのことを聞いてみると、イタズラっぽい目で「すみません、よくわかりません」と機械みたいなことを言い、「ふふふ」と自然に笑った。

それ以来、スピーカーが自分から喋り出すことはなくなった。「電気を点けて」と頼めば電気を点けてくれるし、「六時に起こして」と頼めば、きっちりとその時間にアラームで起

こしてくれる。そんなどこにでもある普通のスマートスピーカーに戻った。一人と一台で過ごしたあの二週間のことも、メモリーから消去されてしまったのだろうか、と少し寂しくなる。

ある風雨の日、ふと思いついて「台風 名前 なぜ？」と尋ねてみた。
スピーカーから答えが返ってくる。

「防災意識を高めるため。覚えやすいようにするため。番号方式による欠点を補うため。環太平洋の国や地域が協力して百四十個の名前を出し合ってリストを作成し、発生順に付けられている」

あの日、スマートフォンで調べた内容と全く同じ回答だった。

——何かを読み込むような、一秒の間。

「……ちなみに私的には、ブアローイって名前が一番強そうで恐いです」
部屋の電気は、柔らかく灯っていた。